



当会出版の第4次大阪府メダカ調査報告書に関する記事が  
読売新聞に掲載されました！

水辺環境調査会では、皆様のご協力を得て、1999年以来大阪府下のメダカ生息調査を継続的・網羅的に実施してきました。この度、メダカ遺伝子解析技術を持つ大阪府立大学大学院生命環境科学研究科との協働調査研究による“第4次大阪府メダカ調査報告”として、「大阪府におけるメダカの生息と遺伝子型分布の実態に関する検討（第4報）」を発行し、環境省はじめ関連省庁、自治体、研究者、報道機関などに配布していましたが、この度、読売新聞大阪本社科学・医療部が取り上げ、2017.04.22付けの同紙夕刊に報道記事として掲載したものです。

第4報では、生物多様性/遺伝子多様性を切り口に、大阪府に於ける在来メダカを巡る遺伝子攪乱の危機的状況に焦点を合わせています。

大阪府大の大阪に於けるメダカ遺伝子解析研究によって、採集場所の33%に、大阪以外の地域から移入された遺伝子を持つ個体が確認されており、遺伝的攪乱が目に見えない形で府下に広がっている実態が確認されました。このことは、異なった地域や水系由来のメダカの人為的移入が、大阪地域から千数百万年の地球史的歳月を経て進化したメダカを消滅させる可能性を示しています。

当会の報告書では、国内外・外来種の移入は、見えない脅威であると警告し、本来自然界では個別の水域や地域ごとに独自の進化を遂げた生き物を、人間の都合で異なる地域に放流して、地域ごとに天変地変に対する適応能力を持った個体群に遺伝的攪乱を起こさせることが無いように、国内外・外来生物に対する市民レベルの理解向上と啓蒙の必要性を提言しています。

メダカの生息調査に取り組みNPO法人「シニア自然大学校」（大阪市）と大阪府立大のチームが、府内全域の河川などで生息調査を行い、遺伝子型が大阪在来種とは異なるメダカが調査地点の3割余りに広がっているとする結果をまとめた。広域調査は全国的に珍しく、養殖メダカの放流による交雑が原因とみられる。メダカは絶滅が心配されており、専門家は「地域の環境に適応した在来種が滅れば、絶滅が加速すると警鐘を鳴らしている。

「遺伝子汚染」3割に拡大 養殖放流原因か

メダカの種類は、北日本と南日本の集団に大別でき、大阪のメダカは南日本の集団に属する「瀬戸内型」など。南日本集団には遺伝子のタイプがある。

近年、在来種が別の地域のメダカと交雑する「遺伝子汚染」と呼ばれる状態が

大阪府内調査



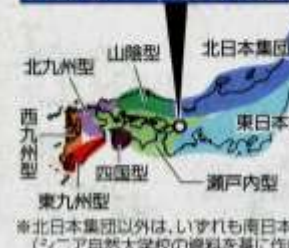
大阪・北摂地域の公園池で確認された黄色い觀賞用メダカ（左）。通常のメダカ（右）と遺伝子型が異なるメダカが増えていく（味さ人提供）

各地で増えている。チームは2010〜16年、府内ほぼ全域の河川や農業用ため池、水路、公園池など55か所で計242匹を採集し、遺伝子を解析した。

その結果、調査地点の約3分の1に当たる18か所で、大阪在来種以外のメダカが確認された。河川（17か所中9か所）や公園池（10か所中5か所）で見つかる割合が高かった。

メダカの主な遺伝子型分布

大阪の在来種以外のメダカ分布	
河川（17か所）	9か所16匹
公園池（10か所）	5か所11匹
水路（13か所）	3か所8匹
農業用ため池（14か所）	1か所1匹
水田（1か所）	0か所0匹
計55か所	18か所で36匹



同NPO講師の林美正さん（78）は「公園池や河川で在来種以外が多いのは、養殖メダカや觀賞用メダカを保護活動と考えて放流しているからだろうが、遺伝子型が異なれば逆効果になる」と指摘する。

メダカは、水質悪化などもあり、環境省のレッドリストで絶滅危惧2類（絶滅を免れたい）と評されている。大阪以外でも善意の放流はあるが、地域のメダカの絶滅につながる行為とすることを、よく考えてほしい」と話す。

の危険が増大）に指定されている。近畿大の北川忠生准教授（保全遺伝学）は「日本各地のメダカは長い時間をかけて環境に適応してきたが、『遺伝子汚染』は、環境への適応度を一気に弱めてしまう。大阪以外でも善意の放流はあるが、地域のメダカの絶滅につながる行為とすることを、よく考えてほしい」と話す。

（読売新聞夕刊 2017.04.22）

尚、当会ホームページ：<http://www.geocities.jp/kohgi04/mizube.htm> で、一連の報告書をご覧ください